

28年9月17日(土)～9月18日(日)
第17回日本早期認知症学会学術大会 in くまもと 熊本市

「開設8年経過した通所リハの認知症予防の実際」
～家族性正常圧水頭症が疑われた一家系～

稲山靖弘 植田浩次 松本祥平 西幸宏 谷正人 石垣恵一 藤田園子
医療法人聖志会 渡辺病院

【はじめに】当院の通所リハビリテーションにおいて、平成20年7月から利用者に対して前頭葉賦活化認知リハビリテーションを開始した。今回、開始後8年経過しており、利用者と非利用加者の認知機能の変化を集積・分析し報告したい。

【対象】通所リハビリテーションには53名の軽度の認知障害・認知症の方が週1回ないし2回参加している。そのうち13～88ヶ月(平均37.8ヶ月間)以上継続している利用者38名(男性8名:女性30名)平均年齢79.8(79～89歳)HDS-R平均 21.1 ± 3.5 を利用者群として、非利用者を対照群12～75ヶ月(平均23.5ヶ月間)以上外来継続している39名(男性9名:女性30名)平均年齢81.3(71～91歳)HDS-R平均 20.1 ± 5.8 とした。

【方法】1回あたり3時間30分の作業療法士による認知リハビリテーション(休憩時間を含む)を行った。内容:①指体操 ②ひらがな並び替え ③条件しりとり等利用者と非利用者のHDS-Rの点数変化を算出し、二標本t検定(ウェルチ検定)を行った。

【倫理的配慮】利用者には研究の主旨と個人が特定されないよう配慮を行う旨を口頭に伝え承諾を得た。

【結果】現在(平成28年3月20日)のHDS-Rの低下点数は、利用者群において 0.6 ± 5.0 点、非利用者群において 1.9 ± 3.6 点であり両者の間には有意な差が見られなかった。 $(p=0.33)$ そこで、今回、それぞれの対象者を経年ごとに分類し、それぞれの点数の変化をグラフに示した。統計学的解析はしていないものの、前述したように、比較しえた5年間で、認知機能の低下の抑制効果が、すべて利用群が、非利用群をうわまっていた。

【考察】今回、平均観察期間38ヶ月間の利用者群において認知機能低下が 0.6 ± 5.0 点にとどまり認知リハビリテーションによる認知機能の維持効果が推察されたが、当院外来受診のみの対照群でも低下が 1.9 ± 3.6 点にとどまり、両群間に有意な差をみとめることができなかった。このことは、利用群、対照群とも入院、入所への移行も影響、また対照群の観察期間の短さの影響もあり、直ちに前頭葉活性化訓練が有効でないとは言い切れないが、他の要因も検討して、事例を積み重ねる必要があると思われた。比較しえた5年間で、認知機能の低下の抑制効果が、すべて利用群が、非利用群をうわまっていたことから、開始初期には、効果がある可能性が示唆された。